反対されながらも夢を描いて

大分県立農業大学校 総合畜産科　2年　安部 竜司

「酪農なんかせんでいい、普通に就職して働け」

12年間、私が祖父母から言われ続けた言葉です。

私の実家は大分市で代々続く酪農家でした。そして、私が4代目になる予定でしたが…

実家の酪農経営の始まりは、曽祖父が突然仕事を辞め、牛を飼い始めた時にさかのぼります。それを祖父が受け継ぎ、その後、父が大学卒業後、自宅から20分ほど離れた山の上につなぎ牛舎を建設し規模を拡大しました。更に、今から10数年前にフリーバーン牛舎を新たに建設しパーラー設備を導入して、搾乳牛を90頭まで増やしました。私は、父や祖父母が作業する姿を見て育ち、幼い頃から父の作業の手伝いをしていました。小学生の頃に将来の夢を聞かれると、いつでも私は迷わず「うしかいになりたい」と答えていました。それを祖父母に話すたびに「酪農なんかせんでもいい」と言われ続け、何故自分の気持ちを否定されるのか判らず幼いころの私はショックを受けつつも、軽く受け流すふりをしてその傷心をごまかしていました。

今考えると、酪農という仕事は365日休みがなく、朝から晩まで働いても得られる収入は少なく、とてもきつい仕事ということを身をもって経験している祖父母の、私に同じ思いをさせたくない気持ちからだったということが判ります。

中学生になると部活動を始めたため、飼料作物の収穫の忙しい時期ぐらいしか家を手伝う機会はなくなりましたが、それでも夢は変わらず私の中にありました。高校進学の際には、将来実家を継ぐために農業高校へ進学し、酪農について学びたいと考えましたが、県内の農業高校は肉用牛しか飼育しておらず、実際に乳牛に触れて勉強できる高校がありませんでした。そのため、高校卒業後に大学へ進学してから酪農を学べば良いのではないかと考えました。

しかし、この頃私は、まだ酪農を自分が、自分の力でやるというしっかりした意識は無かったのです。実家の酪農経営は順調でしたから、後を継げば良いとしか考えていなかったのです。

ここで、進学は普通科ではなく、県内唯一の水球部がある商業高校を選択しました。中学時代に所属していた水泳部の冬季練習で訪れた高校のプールで高校生が行っていた水球の魅力に取りつかれ、本格的にこの競技をしたいと思ったからです。高校では毎日水球に明け暮れながら、将来必要になると思われた簿記や情報処理の勉強や資格取得に励んでいました。

しかし、高校2年の冬、私の夢を揺るがす出来事が起こったのです。それは、父の突然の死です。作業中に畜舎の屋根から落ちる事故死でした。その頃の実家の酪農経営は、

ほとんど父が一人で行っていたため、祖父母は、酪農業を続けて行くことを断念し、父の死から2ヶ月後には牧場を手放すことになりました。私は離農することを必死に反対しましたが、受け入れてもらえませんでした。

生前、父とは、将来実家の酪農を継ぐために大学に進学し専門的に学びたいという話をしていました。それに対し父は、「自分の好きなようにしてみろ」と言うだけで、特別反対も賛成もしていませんでしたが、私が後を継ごうと思っていることを内心は喜んでいてくれていたと思うのです。そして、葬儀の席で父に、必ず牧場を再建すると誓い、「将来、酪農業で自営就農」が私の新たな目標となりました。

現在、私は、大分県立農業大学校の総合畜産科で酪農を専攻し、同じ農業を目指す仲間たちと互いに切磋琢磨しながら学んでいます。ここでは、実践的な農業を学ぶ事ができます。在学する2年間は、学びながら将来の自営に向かって何をすべきかを考える貴重な期間だと考えており、これまでも経験や学業を通していろいろと考えることがあります。

今年6月の初めに大学校の海外研修でドイツに行き、最新鋭の設備を整えた酪農家を見学しました。その際、現地の酪農家が家畜に与えていた飼料は、トウモロコシと牧草で、どちらも自家産でした。また、牛舎の目の前には広大なトウモロコシ畑が広がっており、それを見た瞬間、「日本の酪農はかなわないな」と強烈な印象を受けました。経営者に現在の乳価を聞くと、なんと1リットルあたり45セント（日本円で63円）だと言われ驚きましたが、牛に給与している飼料のほとんどが自給飼料でまかなわれているからこそ、この乳価でも何とかやっていけるのだと思いました。日本では、飼料のほとんどを輸入に頼っているため、世界情勢に左右され、国際価格の上昇、円安などにより価格が高騰して、エサ代だけで経費の半分を占めているのが現状です。このことは理解していたつもりでしたが、あらためて問題として再認識させられました。

また、私は大学校で「母牛初乳と初乳製剤給与による子牛の発育並びに免疫付与の比較検討」と題したプロジェクト活動に取り組んでいます。このプロジェクトに関する調査で酪農家を訪れ、ウイルス性の呼吸器病が蔓延したときの状況を聞く機会を得ました。ここで、経済的損失は言うに及ばす、病気が収束するまでの1ヶ月弱の間、精神的・肉体的に大きなダメージを受けた事を実際に聞いて、ワクチン等による疾病予防の大切さを痛感しました。疾病予防にかかる経費は、1頭あたりでは、そんなに金額も大きくありませんが、規模の大きい酪農家では、大きな金額になります。しかし、その負担は、農場に病気がいったん蔓延した時の経済的負担や精神的負担のトータルの損失に比べると小さいと確信しました。その思いを、自分のプロジェクトの成果発表で多くの酪農家に知ってもらいたいと思い、現在プロジェクトを進めています。このプロジェクトの発表により、「こんな目に遭うのだったら、ワクチンを打っときゃよかった」なんていう酪農家が少しでも減少することを願っています。

これら経験の上に、将来自営する際には、充分な飼料畑を確保し、その土地でまかなえるだけの頭数を飼育し、農場衛生対策を含めた疾病予防に重点を置いた飼養管理が実施できる牧場にしたいと思っています。飼養頭数規模の拡大には時間がかかると思いますが、経営を計画的に少しずつ規模拡大して、軌道に乗せていければと思っています。

頭数規模が小さい時は、従来のように、ただ乳を絞って出荷するのではなく、自分で、もしくは委託で加工して、自ら値段設定ができる販売でなければ経営的に厳しいこととなることが予想されます。

現在、多くの酪農家は、乳を搾りそれを乳業会社に出荷することにより収入を得ています。この経営方法は、ある程度の安定した収入が得られるというメリットはありますが、生乳の取引価格は、乳業会社が決めるため、酪農家が期待する収益が得られていないのが現状です。だからこそ、これからは自ら加工・販売する６次産業による自己完結型酪農を行っていくことが必要だと考えます。これにより生産調整や時季によって変動する乳価に左右されることなく自分で納得できる値段を決めて売り、安定した経営が行えるようになると思うのです。生産する商品については、消費者の意見を聞きながら、時代のニーズに合った商品作りを行っていきたいと思っています。

そのために、まもなく始まる夏期休暇中に、大学校実習の合間を縫って、生産から販売まで６次産業を戦略的に実践されている農業法人と、北海道の広大な土地での自給飼料等の生産による低コスト生産を実践している農業法人での体験研修の計画を立て、日本中を巡回する予定です。

まだ先の話ですが、自営が安定したら、酪農教育ファーム認証をとり、学生体験学習等を受け入れて、子供たちに酪農という仕事や牛を通して生命や食について知ってもらうための活動を行っていきたいとも考えています。

私は、幼いころから反対されてきた酪農への夢を諦めずにここまで努力してきました。将来、酪農で自営就農することを祖父母から了承はもらっていませんが、５年後・１０年後に、祖父母をあっと言わせるような酪農家になって、地域を、そして酪農業全体を引っ張っていけるような人間になりたい。そして、空の上で見守っている父を驚かせたいと思っています。